

# 講座『賃労働と資本』を学ぶ

## 第1回 四国ブロック

### 学習を始めるに当たって

はじめに

司会 Ⅱ本テキスト『賃労働と資本』（岩波文庫版）は、マルクスがドイツ人労働者協会で行った経済学の講義（1847年）がもとになり、1849年に『ライン新聞』に連載された未完のものを、マルクスの死後、エンゲルスによって1891年に改訂版を編集、出版されたものが、現在の内容として読まれています。

また、この『賃労働と資本』の内容についてマルクスは、“はしがき”で、「経済学の最も初歩的な概念さえ

も前提としないであろう」と、述べているように、経済学の初級者用のテキストです。と同時に、マルクスが後に著した『資本論』の入門書としても適しています。

この一年間の連載の学習をとおして、読者のみなさんが『資本論』へ挑戦したい気持ちが湧く、「みんなの学習講座」にしたいと、四国ブロックの仲間も“ふん張り”ますので、乞う、ご期待を！

では早速、ここからは『賃労働と資本』を学ぶ意義について、まなぶ友の会四国ブロック代表の柳本勝彦（以後

Y）さんから、提起をお願いします。

### 『賃労働と資本』の講義の目的は何か

Y Ⅱ司会者が言われたように、『賃労働と資本』は、1847年～49年頃のヨーロッパの革命的情勢のなか、マルクスが行った経済学の講義の原稿がもとになっているので、この時の時代背景のなかでマルクスが労働者に対して、なぜ、経済学の講義をする必要があったのか、を考えてみましょう。

1840年代に入ったヨーロッパは、



ライン新聞

恐れを抱き、急速な成長に労働者階級の段階は、その資本家と資本家との敵対関係を深めていきました。

その前にはすでに、ブルジョア革命がありましたが、旧支配階級の反抗が続き絶対王政がしばらく続きました。しかし、彼らではなく産業資本家が中心となって実権を担っていくため、1848年に民主主義革命が行われ、それがヨーロッパのほぼ全域に広がるようになったとき、資本家階級とともにたたか

資本主義が成長段階に入った時代です。イギリスはすでに、産業革命が完成し、フランスはその最中にあり、ドイツはその入り口に入ったところでした。資本家階級が成長するとともに、労働者階級も急速に拡大し、政治的にも成長していききました。

失業、低賃金に苦しめられ、資本家との敵対関係を深めていきました。1845年から数年間、ヨーロッパは凶作と、1847年には深刻な経済恐慌に陥りました。労働者は高物価、

「真に自分たちの敵は誰なのか」ということに気付いていくのです。すると資本家階級は、その労働者階級の急速な成長に恐れを抱き、

「わが読者たちは1848年における階級闘争が巨大な政治的諸形態で発展するのを見たのであるから、いまや、労働者の奴隷状態の基礎を成すのと同じようにブルジョアジーの存在およびその階級支配の基礎をなす経済的諸関係そのものを一そう詳しく調べるべき時である」と。そこでマルクスは、『賃労働と資本』で、両階級の対立の基礎をなす経済関

今度は封建的な旧支配階級と組んで労働者を弾圧してきます。

経済関係を明らかにし、労働者階級の歴史的任務を自覚させる

Y111848年のパリの6月闘争は資本家階級の反撃のはじまりでした。反革命です。この革命的な諸事件は、資本主義の成長と共に深刻化した資本家階級と労働者階級の階級対立そのものに求めなければなりません。＼はしがき＼で言っています。



1848年、パリ6月闘争

係を明らかにして、労働者階級に自らの階級の地位と歴史的使命を自覚させ、階級闘争に勝利し、自らを解放すると

本質を掴むためには、その社会の土台にある経済のしくみを明らかにしなければならぬのです。

いう確信をもつことを訴えたのです。

司会Ⅱこの時代に、古典派経済学を克服した、労働者階級の立場にたった、科学的経済学の眼で、社会現象の本質を解く必要があつたのです。

YⅡ私たちの眼に映るがままの現象は、本当の姿(本質)をあらわしていません。事物の本質は、すべて逆さまにされ隠蔽されています。したがって、先に見たヨーロッパの1840年代の階級闘争の政治的な諸現象Ⅱ賃労働と資本の敵対関係が鮮明になってきたⅡその

マルクスは『資本論』で、資本主義経済の本質を明らかにしました。それは資本主義社会が、資本家階級による労働者階級の搾取によってのみ成立することを明らかにしたのです。

つまり資本主義社会の経済的運動法則は、資本家階級による労働者階級の搾取の法則Ⅱ剰余価値の法則です。この『賃労働と資本』の本文でもこの搾取のしくみを明らかにしています。(マルクスはこの段階では、概念は「剰余価値」ですが、言葉は「利潤」を使っています)しかし、この剰余価値についても本質とはまったく異質の現象形態であらわれます。それを見てもみましょう。

### 利潤は剰余価値の法則を

#### 隠蔽するもの

YⅡ現実の社会では、剰余価値の法則は隠蔽され、それとはまったく異なる

## ◆特集 みんなの学習講座

利潤の法則に転化しているのです(剰余価値とは、生活に必要な労働を超えた剰余労働に対する価値のこと。剰余価値率とは、賃金に対する剰余価値の割合)科学的な見方。利潤とは、賃金に生産手段を加えたものに対する剰余価値の割合(資本家の見方であり、両者は全く異なるものである)。

利潤ということになれば、資本家は最大限の利潤を求めて競争し、つまり生産手段からも剰余価値が生まれるとするので、資本家の経営手腕や努力、生産方法が優れていれば利潤は大きく、また、資本規模が大きいほど競争に強く、利潤も増大します。利潤の獲得と増大が、資本主義経済の成立と発展の原動力となります。よって、資本主義経済の発展法則は、資本家階級による労働搾取に基づくのではなく、資本対資本の競争によってもたらされる利潤の法則として現れることになり、全く本質の違った見方になるのです。

このように、資本主義経済の本質が、その現象の世界ではいかに異なった姿で現れるかが明らかになりました。そこに、労働者階級の立場に立った経済学の必要性があったのです。

司会(エンゲルスの「前書き」のなか)に、本文を補強する意味の提起がありますので、Yさんから、二点ほど紹介していただきます。

### (1) 労働と労働力の違いの重要性

Y(エンゲルスは、一冊のパンフレットになっていた『賃労働と資本』を、1891年の新版の発行にあたって、この「前書き」を書き下ろして述べています。エンゲルスの訂正は、「すべて一点をめぐっている」と述べ、「労働を売る」を「労働力を売る」に変更したと言って、その変更の意味について「ここで問題になっている労働と労働力の違いは、単なる文字拘泥(まじり)ではなく、むしろ経済学上の最も重要な点の

一つである」と述べて、後にその違いの説明で、「何が重要な一点かが」明らかになっていきます。労働者が売っているのは、「労働」ではなく、「労働力」であり、それは商品であると。この発見は、先に述べた剰余価値の発見とも結び付いており、故に、エンゲルスは「唯物史観」と「剰余価値による資本主義的生産の秘密の暴露」は、マルクスの「二つの偉大な発見」とし、「これらの発見によつて社会主義は科学となった」と述べています。(『空想より科学へ』エンゲルス著)

労働と労働力の違いについては本文にもでてきますので、ここでは簡潔に説明します。

まず、資本主義の前提として、生産手段を奪われ、資本(生産手段)の所有者に雇われ働く以外に生きられない、そういう賃金労働者が出現します。古典派経済学は、労働者は資本家に労働を売って、賃金を受け取るのであると、

考えていましたが、彼らも超えられなかった壁、つまりこの誤りは、賃金労働者の出現、つまり労働力の商品化による、資本主義的商品生産という、歴史的特徴を、彼らは考えることができなかつたからです。だから、日常の社会現象である、「労働した後で賃金が支払われる」という現象から、賃金は労働の価格（対価）であると、考えたのです。

しかし、労働は、労働者が資本家に雇われ、工場で「仕事をはじめのやいや、労働は彼のものではなく資本家のもの」になっているので、労働を売ることはできないのは明らかです。労働者が売ることができるのは、将来の労働、つまり、「労働する能力」です。だから、この労働する能力を發揮する、使用する、消費することが労働です。労働力の商品化が、資本主義的生産の特徴であり、資本主義社会の搾取のしくみを明らかにできたのも、労働力

の商品化にあります。

労働力という商品も、価値と使用価値をもっています。労働力の価値は、労働力を維持、再生産するために必要な生活手段の価値です。この価値に対する支払いが賃金です。他方、労働力商品の使用価値は労働そのものです。労働力が使用され労働がなされると、新しい価値が生まれます。この新しい価値は、労働力商品がもつ、労働能力の再生産に必要な価値よりもはるかに大きいのです。したがって、新しく生まれた価値と、賃金として支払われる労働力商品の再生産費の価値との差が剰余価値として、資本家に搾取されるのです。これは、労働力商品の特殊性によるものです。だから、資本家は支出された資本量より多くの価値を生み出す、その能力を知ったうえで、労働者を雇い、より多くの剰余価値を得ようとするのです。マルクスは、賃金として支払われない、不払い労働が剰余

価値を生み出し、それが資本家の儲けと資本蓄積の源泉になる資本主義の搾取のしくみを明らかにしたのです。

## (2) 「二つの新たな社会秩序が

可能である」

YII エンゲルスの二つ目の重要な提起として、前書きの最後に「二つの新たな社会秩序が可能である」と、社会主義への必然性を明らかにした内容が述べられています。これは、『新ライン新聞』の発刊が禁止されたため、『賃労働と資本』の連載は(5)で終わって、終刊となり、つづきは発表されませんでした。その中断を補うものとしてエンゲルスはこの「前書き」で、この文書を加えたのです。「新たな社会秩序」とは社会主義社会を言っています。したがって、窮乏化と社会主義の必然性に関わるものとしての、本文の4章・5章の「まとめ」的な意味を成すのではないかと思われまます。「前書



『賃労働と資本』を学習する四国ブロックの仲間

き」での文書は少し長いので(ここでは掲載しませんので、『賃労働と資本』を手にして、読んでいただくことをお願いし、エンゲルスの二点目の言葉を含め、『賃労働と資本』の私の「意義」のまとめとして、次のようなことを述べて終わりとなります。

### 労働者階級の成熟が 社会変革の条件となる

Y Ⅱ資本主義社会を成り立たせている資本主義の生産関係の核心は、資本家が、労働者の生産した剰余価値を搾取する、つまり利潤を獲得する関係であります。したがって、資本家の飽くことのない利潤獲得の欲求によって、資本主義の生産関係Ⅱ搾取関係が拡大し発展していく。その一方で、生産と資本の大部分が少数の大資本家の手にまします握られていて、生産の社会化が高度の水準に達し、ここに社会主義

を実現する客観的条件(物質的前提条件)が生み出され成熟していくこと。他方では、機械制大工業のもとに労働者階級がますます結集され数を増大し、訓練され、組織されていき、ここに資本主義を社会主義に変革する主体的条件が生み出され、成熟していくことが解明されています。

以上で、私の『賃労働と資本』を学ぶ意義の提起を終わります。

司会 Y さんの「意義」の提起の中心は、「現象から本質を見抜く」眼を養うマルクス経済学の学習の重要性と、資本主義社会の核心である剰余価値の法則の理解の重要性でした。これを頭に入れて、挑みかかる学習にしましょう。

今回は、第一章賃賃とは何かです。